

研究成果を国際的(ここでの「国際的」は英語とほぼ同義ですが)に発信することが求められる時代、人文書や学術書の邦訳はどのような意味があるのでしょうか？

専門家が原語で読んでいけばいいのではないのでしょうか？

今回の講座では人文書・学術書の翻訳出版の社会的な意義についてお話しします。

また出版の実際について、企画から実際の翻訳作業まで、翻訳者としての講師の実体験から具体的に紹介します。

知のインフラを整備する —人文書・学術書の翻訳とその実際

秋草俊一郎

大学院総合社会情報研究科准教授

平成16年 東京大学文学部西洋近代語西洋近代語学科卒業
平成21年 東京大学大学院人文社会系研究科修了 博士(文学)
平成18年 日本学術振興会特別研究員
平成21年 ウィスコンシン大学マディソン校客員研究員
平成24年 ハーヴァード大学客員研究員
平成26年 東京大学教養学部専任講師
平成28年 日本大学大学院総合社会情報研究科准教授

<主な著書>

『ナボコフ 訳すのは「私」—自己翻訳がひらくテキスト』東京大学出版会 2011

『アメリカのナボコフ—塗りかえられた自画像』慶應義塾大学出版会 2018

『「世界文学」はつくられる 1827—2020』東京大学出版会 2020

<主な訳書>

ローレンス・ヴェヌティ『翻訳のスキャンダル—差異の倫理にむけて』
フィルムアート社2022(共訳)

アレクサンダル・ヘモン『私の人生の本』松籟社 2021

マッシュュー・レイノルズ『翻訳—訳すことのストラテジー』白水社 2019

お申込み
お問合せ

日本大学大学院総合社会情報研究科
公開講座事務局(研究事務課)

受講申し込みは、本研究科ホームページにて受け付けます。